



寶隆公詠集
 息雜

特 別
 8066
 3



4
8066
3



< 95-229 >

言出

永正三十四月次

山崎の事... 永正三十四月次

答言

... 答言

永正三十四月次

今更の... 永正三十四月次

因意

... 因意

人侍

... 人侍

忠信書

... 忠信書

通書

... 通書

見書

... 見書

蔵書

... 蔵書

翁十三廿五元

見意

大伴乃川と人ようせとせんに
いとかりと成とらなむし
三首懐翁 永正十七月次
忘れぬはのりしと
時に見意

岩まよわおふたふた名はり
あゝ浪のうらたふらう
寄月見意
村をの儀もことけく

為意

いせんおもむらり河え
おしりすいさしちり
初為縁意

永正二十四月次

初為縁意

永正七月四月次
年月縁もてし
初逢意

夜不面

池水のひらめきのこころもあはれなるも
負ふ恋

あはれなるもあはれなるもあはれなるも

享和六七年後撰三 後撰三

道のゆきもあはれなるもあはれなるも

社のあはれなるもあはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるもあはれなるも

後撰切恋

あはれなるもあはれなるもあはれなるも

逢ふ恋

あはれなるもあはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるもあはれなるも

若立恋

あはれなるもあはれなるもあはれなるも

欲願恋

あはれなるもあはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるもあはれなるも

歌恋

あはれなるもあはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるもあはれなるも

あはれなるもあはれなるもあはれなるも

ゆえていぬ鳥の羽の白羽のうらみくはてしなく
冬恋

あやめ人のうらみくはてしなく
夏中握君の

あやめ人のうらみくはてしなく
夏恋

あやめ人のうらみくはてしなく
胡恋

あやめ人のうらみくはてしなく
書恋

あやめ人のうらみくはてしなく
書恋

あやめ人のうらみくはてしなく
書恋

あやめ人のうらみくはてしなく
幼恋

あやめ人のうらみくはてしなく
近恋

あやめ人のうらみくはてしなく
冬恋

蘭玄

おしなほし人の花海にそまはうのちのちのちのち

忠經年玄

おしなほし人の花海にそまはうのちのちのちのち

経年玄

つねのつねのつねのつねのつねのつねのつねのつね

つねのつねのつねのつねのつねのつねのつねのつね

冬三六四月天
忘位不意

つねのつねのつねのつねのつねのつねのつねのつね

遠玄

おしなほし人の花海にそまはうのちのちのちのち

おしなほし人の花海にそまはうのちのちのちのち

おしなほし人の花海にそまはうのちのちのちのち

蘭遠路玄

おしなほし人の花海にそまはうのちのちのちのち

蘭海路玄

おしなほし人の花海にそまはうのちのちのちのち

おしなほし人の花海にそまはうのちのちのちのち

有玄

おしなほし人の花海にそまはうのちのちのちのち

同居云

田舎に居てはさういふ可成り寂しくはなからぬ
旅云

あやうき世の中はさういふ可成り寂しくはなからぬ
永正二十二月欠 霧中云

あやうき世の中はさういふ可成り寂しくはなからぬ
永正二十二月欠 霧中云

あやうき世の中はさういふ可成り寂しくはなからぬ
偽云

あやうき世の中はさういふ可成り寂しくはなからぬ

あやうき世の中はさういふ可成り寂しくはなからぬ
永正二十二月欠
文徳三十四月欠

あやうき世の中はさういふ可成り寂しくはなからぬ
不浄云

あやうき世の中はさういふ可成り寂しくはなからぬ
永正二十二月欠
女月九十七号合
獣意

あやうき世の中はさういふ可成り寂しくはなからぬ
永正二十二月欠

永元九四日

稀回恋

母の心なほちかたきこころのまじりて

久恋

あはれ(恋)のこころのまじりて年月はながく

旧恋

非代のこころのまじりて年月はながく

思

あはれ(恋)のこころのまじりて年月はながく

片思

あはれ(恋)のこころのまじりて年月はながく

片恋

あはれ(恋)のこころのまじりて年月はながく

恋恋

あはれ(恋)のこころのまじりて年月はながく

あはれ(恋)のこころのまじりて年月はながく

あはれ(恋)のこころのまじりて年月はながく

恋久恋

あはれ(恋)のこころのまじりて年月はながく

恋恋恋

うらやまのこころをわすれぬ
あはれなるをこそこそこそこそ

昔の月夜

人さしあはれなるをこそこそこそこそ
うみはゆるぎなく海をたぬるは

聖三十八月欠

昔の月夜

あはれなるをこそこそこそこそ

文龜四三月欠

昔の月夜

あはれなるをこそこそこそこそ
うみはゆるぎなく海をたぬるは

ええええええええええええええええ

あはれなるをこそこそこそこそ

永正九六日 朝倉貞景退善のころの事
あはれなるをこそこそこそこそ

昔の月夜

あはれなるをこそこそこそこそ

あはれなるをこそこそこそこそ

あはれなるをこそこそこそこそ

文龜元十四月次

寄出云

いよいよなわさうあまのこころさしきぬ思方もの末

和志九六月日胡念真景進書うらなひ

寄歸云

いよいよなわさうあまのこころさしきぬ思方もの末

千文明十三

寄留云

いよいよなわさうあまのこころさしきぬ思方もの末

寄原云

いよいよなわさうあまのこころさしきぬ思方もの末

寄用云

いよいよなわさうあまのこころさしきぬ思方もの末

寄路云

いよいよなわさうあまのこころさしきぬ思方もの末

寄留云

いよいよなわさうあまのこころさしきぬ思方もの末

寄遊云

いよいよなわさうあまのこころさしきぬ思方もの末

寄澤云

いよいよなわさうあまのこころさしきぬ思方もの末

永正九十四月次

永正十一年四月文 寄何志

今社をわらわす事してはる若狭なる田の川をうらむる
事、中におしるくちておひる玉川のせりもたれに袖を
たうおふちる中川をゆめてしるふつせよつていふ

寄海志

歌百首和寄 石原社信示生信信系嘉進明一六六七

ふらふらおのほろふもさうらふたぬあはれたのめい
ふし思ふくひもあはたふすけしるる海のいろもさうら
もぬふふとめいし海の底のどらまじりうらめしき
をのちかひぬらん人さあつて海のいろもさうら
あはれに

千文明十三

寄若水志

うづるもかみぬあつらうきららぬのくぬ浪致袖あけ
いもぬらしうらりそこのとららぬかかけはつらうかたぬ
永正十四四月次續撰三

寄禁中志

千文明十三

あつらうし九つ福の中よてんせうらら林のあは
あつらうし

永正十三年四月次

寄井志

うらめしきよき葉の川はつてまじりぬらぬのうら
らぬかみ人のほららに山の井なるもぬあはれに

張撰吟五入元三二寸五

寄播磨

あまのつらから一年の歳のりかへるはなれはるる

寄草野

いほりこころのふかきつらさのつらさのつらさのつらさ

寄初子

あはより袖のしるしのおもひのつらさのつらさのつらさ

寄忠草

千文明

永六八四月次

寄思草

あはれいとしるしのつらさのつらさのつらさのつらさ
そらのすきあつたつらさのつらさのつらさのつらさ

寄萱

千文明三

あはれいとしるしのつらさのつらさのつらさのつらさ

寄蕨

千首和奇下

あはれいとしるしのつらさのつらさのつらさのつらさ

寄木

あはれいとしるしのつらさのつらさのつらさのつらさ

あはれいとしるしのつらさのつらさのつらさのつらさ

寄花

千文月十三

又月十三 禁目

家系列

永正六年四月

又月十三 禁目 家系列 永正六年四月 永正六年四月 永正六年四月

永正六年四月

永正六年四月 永正六年四月 永正六年四月 永正六年四月

永正六年四月

永正六年四月 永正六年四月 永正六年四月

千文月十三

千文月十三 千文月十三 千文月十三

千文月十三 千文月十三 千文月十三 千文月十三

永正元八月欠

阿久志

いづれも此も石の次のいづれも清め

いづれも此も石の次のいづれも清め

永正五年八月欠 燧火

いづれも此も石の次のいづれも清め

永正六年八月欠 備馬樂

いづれも此も石の次のいづれも清め

いづれも此も石の次のいづれも清め

永正四年欠 二枚

いづれも此も石の次のいづれも清め

永正二十四月欠 石瀬杜

いづれも此も石の次のいづれも清め

阿波子杜

いづれも此も石の次のいづれも清め

三無

いづれも此も石の次のいづれも清め

永正三十七月欠 筑波山

いづれも此も石の次のいづれも清め

安積沼

永正十四月欠

いづれも此も石の次のいづれも清め

文龜三十四月次 念切

しんじつはとめはしる車のことなむかひに

念社

さしつねのやまより入り高しつはまかむら猫と

後撰一六八の念 禁裏御前座

いよせと心してせり有の中はまかむらに

念植物

禁裏御前

くつてみかむらとゆうこ子にまかむら

文龜十六月念 念鳥古世坊

福古寺祈念

後世のこころはまかむらとゆうこ子にまかむら

見つか目お念

まかむらとゆうこ子にまかむらとゆうこ子に

念の念約日記

はるか昔のこころはまかむらとゆうこ子に

念の念約日記

念の念約日記

念の念約日記

念の念約日記

雜部

天

あふれてもみまやうららるる月日は光の身
後撰一
まよひてくちまらるる道はあまの御守り

天象

天象
いらいとあまの御守り
永正四年四月文
いらいとあまの御守り

風

いらいとあまの御守り

雨

花よりにみちるる雨の音は
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に

軒雨

あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に

あまの木の葉の音に

あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に

橋雨

あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に

あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に

あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に

あまの木の葉の音に

あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に

煙

あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に

書

あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に

あまの木の葉の音に

あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に
あまの木の葉の音に

江落

いさふ船入のよふにすゝむのこゝろに花のこゝろ

ふは鹿のかりのうさぎのしきりかきかきしつ

野風

うらむしむて花をよむ花の表入つておぼろけ

永正九十四月次

紅梅のしありれうき世入つてのこゝろに花のこゝろ

鶯

うさぎはうきみんちのこゝろに花のこゝろ

瀧水

朔日のよふに花のこゝろに花のこゝろ

湯より礼束

永正九十四月次

玉の緒のよふに花のこゝろに花のこゝろ

須保のよふに花のこゝろに花のこゝろ

しんじゆのよふに花のこゝろに花のこゝろ

山中歌

あつたのよふに花のこゝろに花のこゝろ

池水久遠

あつたのよふに花のこゝろに花のこゝろ

水石屋年

永正十一年九月十九

池水のまじりかたにさかすまを天へさるる

永正十六四月

水風夜深

あつらぬる味より浪のまじりかたをさるる

河

いづれかたのまじりかたにさかすまを天へさるる

あつらぬる味より浪のまじりかたをさるる

守水流清

永正三十一四月

いづれかたのまじりかたにさかすまを天へさるる

晴後遠水

あつらぬる味より浪のまじりかたをさるる

いづれかたのまじりかたにさかすまを天へさるる

永正九四月

あつらぬる味より浪のまじりかたをさるる

海

いづれかたのまじりかたにさかすまを天へさるる

濱砂

あつらぬる味より浪のまじりかたをさるる

路

あつらぬる味より浪のまじりかたをさるる

田里路

松風をたてしつゝしむらひ海のうらのくくを随ふなり

永正十二年四月次 御松

しよの福しるもの初り松風はあつてしん中似

文明九十七号各 砌下有松

雲のうらみしつゝしむらひ松をみえりせえりしつゝしむ

松歴年

れゆの松し紅葉しつゝしむらひのせりしつゝしむ

松歴年 永正十二年四月次

花のつらきつゝしむらひのせりしつゝしむ

松有観文

花のつらきつゝしむらひのせりしつゝしむ

永正元年 松葉不失

霜霜のつらきつゝしむらひのせりしつゝしむ

松風入琴

吹ふ松のつらきつゝしむらひのせりしつゝしむ

竹

竹のつらきつゝしむらひのせりしつゝしむ

竹のつらきつゝしむらひのせりしつゝしむ

松竹

永正九百三

窓のつらあふしをしのびては花の影を
月影のまのあたりにては花の影を

里行

道一歩も申さずしては花の影を

山のおもひのつらあふしをしのびては花の影を

續撰吟よみ歌留本竹風如雨

ふし竹の窓をつらあふしをしのびては花の影を

永正十二百九百三

不承のあふしをしのびては花の影を

竹不改色

文龜二正正四月文

ふし竹の窓をつらあふしをしのびては花の影を

永正四四月文

ふし竹の窓をつらあふしをしのびては花の影を

永正五六月文

ふし竹の窓をつらあふしをしのびては花の影を

幽徑苔

庭のあふしをしのびては花の影を

永正三六月文

ふし竹の窓をつらあふしをしのびては花の影を

あふし

かゝる人ありてはしきすはるるをみればしきすはるる

鳥

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
何となく

何となくおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

秋の九十二日 言林も宿

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

鷹

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

夜鷹

秋の九十二日 言林も宿

鷹

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

鷹

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

鷹

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

文選元同六四日 鷹

おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

江邊路

高き山を越えて江のほとりへ下りて路のゆるぎなく
江の路を飛

ゆるぎなく江のほとりへ下りて路のゆるぎなく
江の路を飛

ゆるぎなく江のほとりへ下りて路のゆるぎなく
江の路を飛

坂隈の六代目

ゆるぎなく江のほとりへ下りて路のゆるぎなく
江の路を飛

相合本日天年純號丹於信苗文乃龜農与齒比當志比兼賀二代

文龜二六四日 倒亀

ゆるぎなく江のほとりへ下りて路のゆるぎなく
江の路を飛

龜万年友

吉義賀代者當世乃久余農當不山齒比毛純字信遠千喜良

永正六九月次

瀬魚

ゆるぎなく江のほとりへ下りて路のゆるぎなく
江の路を飛

熊

永正二六

ゆるぎなく江のほとりへ下りて路のゆるぎなく
江の路を飛

犬

寺の縁をめぐりてははるかにさきさきしむるものありけり

永正十九年五月六日 古寺路

たふさくはなれしうちの辰のさしけりてはてすすの葉の袖

古寺路

しよつとてはなれしものさきさきとてはなれしものさきさき

巨基 居あ

いづかほにさきさきとてはなれしものさきさき

用居

ちりりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらり

同居本

永正二〇日

りりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらり

大岡亭舎南屋山家

たふさくはなれしものさきさきとてはなれしものさきさき

結撰又

ちりりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらり

冬無三四月

たふさくはなれしものさきさきとてはなれしものさきさき

一寺路

たふさくはなれしものさきさきとてはなれしものさきさき

山家

永正二十二月

永正二十二月

しすしてしみる世の夢はさのりかたはなほつれぬをこころ
山より物へ心はつたふりてはなほつれぬをこころ

又明九七

山家雨

夕べはしるしの山みづのこころを言はぬはなほつれぬを

又明十

山家夕

あけぬあけぬいよけけけけけけけけけけけけけけけけけ

永正二十二月

山家燈

すきゆくをみづつてまゝの影をけしめけしめけしめ

山家鳥

もたしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめしめ

山家松

あけぬあけぬいよけけけけけけけけけけけけけけけけけ

しすしてしみる世の夢はさのりかたはなほつれぬをこころ

山家昔

あけぬあけぬいよけけけけけけけけけけけけけけけけけ

山家嚴

あけぬあけぬいよけけけけけけけけけけけけけけけけけ

山家人精

あけぬあけぬいよけけけけけけけけけけけけけけけけけ

あけぬあけぬいよけけけけけけけけけけけけけけけけけ

釣魚

水乃かゝるはくしほこしとる魚のまゝ人のあつゝあや

漁父出浦

夕なまの磯に待つ浦のつらみ入目すめくそ魚を思ふ

漁舟連波

とよれと出せしは波のうらみすつらみあつゝあや

院見漁舟

わ田小みよらのとらふちあつゝあやとるまゝしとる

漁舟火

いゝ魚のあつゝあや沖の燈小みよらあつゝあや

遊女

永正十四月次
あつゝあや水乃煙あつゝあやあつゝあやあつゝあや

酒舟

永正十四月次
夕日とみ末登の水乃あつゝあやあつゝあやあつゝあや

浦小舟

朝あつゝあや塩水あつゝあやあつゝあやあつゝあや

望遠帆

永正十四月次
浪内のかゝるはくしほこしとる魚のまゝ人のあつゝあや

續撰吟集三

しつらりたる乃小嶋の舟を祀しつゝ長とつ
岸頭舟舟

川舟の舟を祀しつゝ長とつ
永正二年四月廿

霧中舟

舟人から舟を祀しつゝ長とつ
永正二年四月廿
し女子の羽衣を祀しつゝ長とつ

霧中舟

舟として祀しつゝ長とつ
ここ燈

永正六年四月廿

舟を祀しつゝ長とつ
霧中舟

舟の後を祀しつゝ長とつ

何

舟を祀しつゝ長とつ

續撰吟集三

舟を祀しつゝ長とつ

永文明十一年

舟を祀しつゝ長とつ
ここ舟

ま花つともおのむらさきのこころおのむらさきおのむらさき

旅行

永正九六月日

朝劔貞景造善より

越乃らすより夕日の志しきついでにわが旅の末の
まや床なまや花もまよひ言ひつらうにいつくは
越やしてあまふらふよつひきあまふらふとて
おもひしをぬりしの家のたふせし物をつらしてあまふらふ

旅宿

しらしらおの家のこころしきまのたのしみ

野宿

ましらしらおの家のこころしきまのたのしみ

文龜四二

ましらしらおの家のこころしきまのたのしみ

文龜十三廿五

こころしきまのたのしみ

永正五廿六月日

野宿

枕のむらさきもつらうにわが旅の末の

月旅宿友

三首懐海

こころしきまのたのしみ

永正四二四月日

旅宿夜雨

あまふらふよつひきあまふらふとて

風破旅屋

文龜三廿四月日

ましらしらおの家のこころしきまのたのしみ

水邊旅宿

永正三四月欠
かみ祓すの袖よとてや里人若にわらわのいづらんを

水御旅

あじしとくまのいづるせのの枕をうたふのききよきよの海

海路

永正三四月欠
はらうしおのいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる

海旅

しろうみの枕のこいみありう海にうらみかき旅をうたふ

後撰天和ニ禁裏 春日 四巻 後

おもひよる有しおのいづるいづるいづるいづるいづるいづる

湊頭旅泊

永正六六月欠
しろう油のいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる

旅泊重夜

きつうあゆみのいづるいづるいづるいづるいづるいづるいづる

死にぬ出ていく夜のいづるいづるいづるいづるいづるいづる

永正三四月欠
おもひよる有しおのいづるいづるいづるいづるいづるいづる

おもひよる有しおのいづるいづるいづるいづるいづるいづる

永正三四月欠
眺望

ながしきよとて長しとて言ふまじらひあはれいづるいづる

いとせり夕日よそにたてあはれいづるいづるいづるいづるいづる

栢道微吟集 海眺望

心ゆくも夕おけけり暮秋のあぢきなき海なる舟
木花出るもわらう船のうらやまふもあはれはるる舟

夢

ねむりもやうらやまたぬはなむらむら夢の舟

草庵貽夢

永正元三四月欠
こつかや夢のむらうの花もむらむら草庵の

夢驚

千奇明三
いぬてしうらやま夢をさあしむれはるる舟のむら
深夜夢覚

おとろくも夢のむらむら舟のむらむら夢の舟

晚眠易覚

まいぬもむらむら舟のむらむら舟のむらむら

張橋中集三
いよせも早の夢の舟のむらむら霜のむらむら

迷懷

し朝のゆらぐ舟のむらむら舟のむらむら
うらやまも舟のむらむら舟のむらむら
ふん舟のむらむら舟のむらむら舟のむらむら
あぢきまも舟のむらむら舟のむらむら

永三十四月六
あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる

あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる
あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる
あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる
あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる
あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる

夜迷懷

寄露迷懷

あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる
あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる
あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる
あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる
あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる

文徳元年十月六日

あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる

小歌

あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる

文徳元年九月廿五日

あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる

酒

あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる

簾

あつりぬ梅未ふぬはるもこひぬおもふる君とらるる

千文月十二

ぬくくうおむいしりかめうり川さくえ世ぬいさるがむ

十首記下

おは述懐

あつらてのさつぬのそらの埋らうらまてのうらむ

名取

もろこにあんさつすうらふらふにせぬいさるがむ

永正四年四月六

寄名取

さうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

懐旧

おまののうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

さゆくうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

世にすうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

近世

末の世にうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

後撰吟八

月日とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

後撰吟八

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

後撰吟八

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

後撰吟八

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

小

いかにたよしに世にうらうらうらうらうらうらうらうら

後撰吟八

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

文明七年

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

懐旧

老とかなんか涙のちかきよとていふさの子あつこころあ
わしとれぬあつこころとていふさの子あつこころあ

永正五月初六

對月懷旧

月よりとせこころおもれとていふさの子あつこころあ
たれぬあつこころとていふさの子あつこころあ

老後懷旧

こころおもれとていふさの子あつこころあ
たれぬあつこころとていふさの子あつこころあ

永正十二月初六

海懷旧

こころおもれとていふさの子あつこころあ
たれぬあつこころとていふさの子あつこころあ

老後懷旧

こころおもれとていふさの子あつこころあ
たれぬあつこころとていふさの子あつこころあ

思往事

こころおもれとていふさの子あつこころあ
たれぬあつこころとていふさの子あつこころあ

往事如夢

こころおもれとていふさの子あつこころあ
たれぬあつこころとていふさの子あつこころあ

往事如夢

こころおもれとていふさの子あつこころあ
たれぬあつこころとていふさの子あつこころあ

永正十四月初六

こころおもれとていふさの子あつこころあ
たれぬあつこころとていふさの子あつこころあ

千支明十三
一技の花はゆらぎしききせてかうらら成うけはる

如是録

信解品

あつちの福のやまをこゝにせよとてしるすのさやふもたぬ

續撰吟八冬巻三 藥草吟品

ゆるあつちのちとてかたじけなくも花のいふところす

十月六日 妙華寺 開白廿三廻

法花經授記品

續撰吟八冬巻三十二 理覺院 勸進

勸發品

あつちの法のかさめをいふらふはせぬかたのい

壽量品

あつちのふうあつちのゆきとてさうとてさうとてさうとて

續撰吟八冬巻三 分別切花品

あつちのふうあつちのゆきとてさうとてさうとてさうとて

法師功德品

續撰吟八冬巻六 京名法師 遊善

藥玉品

衆山之中 頂弥山為第一

天明七年正月廿九日 贈内大臣 世三廻
そのと一廻てあふきしたが法の花よりぬかうとせりらるる山

妙音品

さて何れも此社の文のしよのこころにほかにほのそくをひりて

ね花 甲子廻

観世音菩薩普門品

さうらうのあまののこころにやそきよくはくさくあまはしりて

續撰吟八字秘文

観普賢経

やまゆきさうらうのちまひしし胡高のちまひ出せぬとあま乃す

文珠

しむらうのふくしんがさうらうの佛の徳とあまのよけあ

春日

永正六四月六

いんげん乃がうしてまの成いの成しんみくさうあまのこころに

天てつゆ力をあませてもまの日の若くやうく光なるべし

十文明十三

善日山者のうらみのこころにさうらうのしんがあまのこころ

貴布祿

十文明十二

神志いふこころにすねもりの成き布祿川にせりて海うら世

福荷

文有九十二十

あゆむにらうひしそく福荷山祿のしんがあまのこころに

非社

善日山いものわけあまのこころにさうらうのあまのこころに

續撰吟八字秘文 大永三回三廿八

跡を礼名まをたてぬの世のあまのこころにさうらうのあまのこころに

わゆてしす光どう思らんと志地の外より昔りたとも
尺もやうれし神ともすつまつらみつらに誠を祈り
かゆらむらそれお神力より成るまよぬる痛の根付

永正八月欠

神祇

文龜二月欠

目のもくは神のいしむるまよふらして民のうら
神とてう君のよせに復らわねの色もあつて
神といふはまにまらつてはまらつてはまらつては
後撰吟集三
神とてやとわのま今し世にわらも残らむけあつた
わら君のうこつ海山のまらしてははのまら神のまら
めらみぬぬおらつてはわらけつは月日うたの神のいあ

みい山にすつて一はまの目とていひまらつては

社頭柳

永正元十月欠

おのよやくのうらつては神のまらつてはまらつては

若柳神祇

玉にうらつては神のまらつてはまらつては

永正西の軍家守合

祈世神祇

おのよやくのうらつては神のまらつては

祝

文龜元八月欠

天地しとらつては神のまらつては
おのよやくのうらつては神のまらつては

永正十四月欠

そとに... 永正十四月欠
けいけい... 永正十四月欠
... 永正十四月欠
... 永正十四月欠

祝言

言て... 唐賀
... 唐賀

君... 永正元六月欠

吉日祝

永正元六月欠
... 吉日祝

晝祝

永正元七月欠
... 晝祝

夕書祝

... 夕書祝

永正二十四月欠

... 永正二十四月欠

旅祝言

秋はすはれわづ君の國のうら成きしよりいひおのゝら

冷鹿川

おきて世のゆきやいほまて冷鹿川の中流の如くは

伊勢山

胡弓の家の色と白い由山林の花のやうにうみ

三熊野

よまていつつら半らよみまらういみて乃こそあつ

志賀浦

ぬえや有明り月乃の波流うさしこり白志うら由松

生海

しんがよふらうらうの生の海や何とらうのう若狭のうら

なご乃あゆり約すうあのか海はあゆみ海うけう海浪

永正二十月文徳

平ら成志のうらやういふ小松原のうら二葉を

文徳二八月文

雲のうらよあまし物成鷹の糸のふらふ田上あつ

小倉山

栄雅点

おくら山にうらうらういひおののからうらうらう

伏見里

年卯
あしとふとく又あつむいとの若しあつむいふらあつむいあ

遠

もろくわえもあつむいあつむいあつむいあつむいあつむいあ

永正三十四月次速

何れあつむいあつむいあつむいあつむいあつむいあ

文龜二八月次快

月たぐわけるあつむいあつむいあつむいあつむいあ

文龜二八月次原

海山あつむいあつむいあつむいあつむいあつむいあ

原

永正三十四月次

あつむいあつむいあつむいあつむいあつむいあ

文龜二八月次忙

あつむいあつむいあつむいあつむいあつむいあ

永正三十四月次折 本々不審

あつむいあつむいあつむいあつむいあつむいあ

速

あつむいあつむいあつむいあつむいあつむいあ

文龜二八月次雜物

あつむいあつむいあつむいあつむいあつむいあ

茶

永正六月次

對鏡加身卷

しんはらけの外世おもひ礼のこほしき人こころみ

永正十四月次

牆

あの中しゆらちちしりみこころをむせむのまゝ

七

琴の弦のつらりかきよきうら二方安んずるまゝ

琴水雜

しんはらけともしゆはみせむらりかきよきまゝ

二帝

四方の民りのかりきの市に生てこころをむせむのまゝ

二揚

昔のつと揚けさしんはらけのまゝ

二本

ちりちりあさむらみせむらりかきよきまゝ

ころ種のをしんはらけのまゝ

三鐘

ちりちりすましんはらけのまゝ

二花

はらけのしんはらけのまゝ

雜極物

續撰一大永元乙卯禁裏の尚座

永正元七月次 浦崎子

玉うきとわかれしうらなくあそびの情急る可しうせめえ

由良の器

とらふあはくやうにうめりあはらうてあやう

花と葉又字化

とらふあはらう花と葉のしれはらうあはらうあはらう

苦道未不易

あまてしうらうのうらうあまてしうらうあまてしうらう

提壺能勸沽酒

竹のうらうあまてしうらう山に酔ひてむらうあまてしうらう

雀森宮成自相賀

竹内修云の題哥

このうらうあまてしうらう村すめりあまてしうらうあまてしうらう

林下幽閑氣味深

永正元八月次

あまてしうらうあまてしうらう露のうらうあまてしうらうあまてしうらう

薙草通三徑

里のあはらうあまてしうらうの道うらうあまてしうらうあまてしうらう

あまてしうらうあまてしうらうのうらうあまてしうらうあまてしうらう

永正元六月次

いほや

神しうらうあまてしうらうあまてしうらうあまてしうらうあまてしうらう

もろり

此の世に生れしは 何れも 命の世に 生れしは 命の世に 生れしは

永正四年六月六日

人の世に生れしは 命の世に 生れしは 命の世に 生れしは

永正四年六月六日

は 命の世に

若くは 命の世に 生れしは 命の世に 生れしは

法よげんけい

大乗七又目

法よげんけい

を 命の世に 生れしは 命の世に 生れしは

遠寺晚鐘

は 命の世に 生れしは 命の世に 生れしは

命の世に

は 命の世に 生れしは 命の世に 生れしは

は 命の世に 生れしは 命の世に 生れしは

は 命の世に 生れしは 命の世に 生れしは

は 命の世に 生れしは 命の世に 生れしは

は 命の世に 生れしは 命の世に 生れしは

實世元服の可

領撰吟六

は 命の世に 生れしは 命の世に 生れしは

命の世に 生れしは 命の世に 生れしは

命の世に 生れしは 命の世に 生れしは

位山に秘らしむ御てこり世にみらぬと君のまゝにうてみら

讀撰吟七 声山よて落髪乃可

くら髪のありぬと今も方のこつそ不許んをう

ちをすくじたるの口もしてはら頃のうまにさうさう

ふらふらうらうらうとくしあいにまゝいぬあすこのあな

讀撰吟六 流林乃ゆりわがなほづらみ八十首内

めり回しきめおしむものいそこすじくもやんま

細川右京大夫常植四十九日享禄六入道内存

いりてつらりけり

あつてつらりけりあつてつらりけりあつてつらりけりあつてつらりけり

御遊

ふらふらしてとらるるすまうこり礼々向回とふりしぬれぬ

二月一日故柏二位忠富第三回と法事とをい

ゆ一河冷泉大納言政為許り雅業王よらしてつらり

君はあつたつらりあつたつらりあつたつらりあつたつらり

わつしうこ一年とまのあとの及いして残る方もこのこと

うに成まうこあ

今何をも又年うらぬとこり世のあつたつらりあつたつらり

深かりてゆらうぬとこりしうらぬとこりしうらぬとこりしうらぬ

ふらふらの年のことわらわらわらわらわらわらわらわらわらわら





